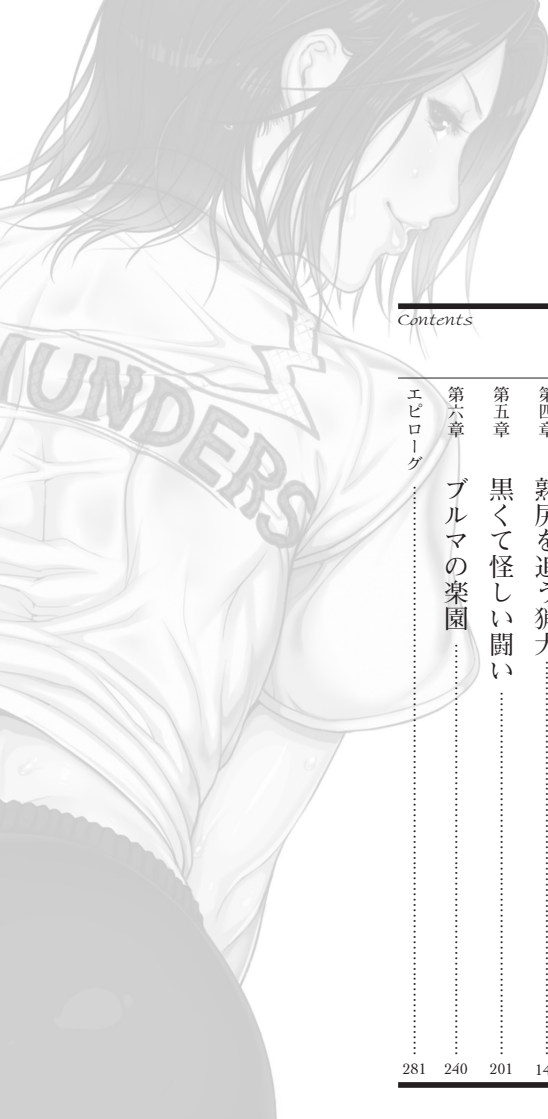




熟女がブルマに穿きかえたら  
ママさんバレーパラダイス

羽沢向一  
挿絵／くろふーど

立ち読み版



プロローグ	4
第一章 ブルマを穿け!	24
第二章 バレーコートの誘惑	59
第三章 奥様を縛ってみた	100
第四章 熟尻を追う猟犬	149
第五章 黒くて怪しい闘い	201
第六章 ブルマの楽園	240
エピローグ	281

## 大橋 広人

(おおはしひろと)

十七歳の男子高校生。両親が仕事でアメリカにいるため、叔母の夏美の家に居候している。

## 大橋 夏美

(おおはしなつみ)

バレーチーム光陽サンダースのコーチ兼主力選手。大学の名門バレー部でレギュラー選手だった。気の強いスポーツ美女。独身で現在は甥の広人と二人暮らし中。

## 河野 由貴

(こうのゆき)

三年前に夫を亡くした未亡人。高校時代は陸上部の短距離選手。明るくて気さくな愛らしい美人。

## 立原 渚沙

(たちほらなぎさ)

専業主婦。趣味で西洋人形を作っていて、その世界では有名人。裕福な家庭でお嬢様らしい上品な美人。夫は北海道に単身赴任中。

## 志摩 響子

(しまきょうこ)

十一歳までイタリアで暮らしていた帰国子女。読書家で、真面目な性格。ふっくらした肉感的な身体を持ち主。夫は単身赴任中。

## 木崎 恵理

(きざきえり)

地区最強を誇る西町ストライカーズのキャプテン。夏美の大学時代の先輩。



（夏ちゃんがブルマを脱ぐ！）

と、広人は胸の内で歓声をあげた。

しかし、夏美はブルマの縁をつかもうとはしない。かわりにブルマの股間の布を右へとずらす。

濃紺の布の中から、いつそう濃くなった汗の香りがあふれるとともに、肌の色が現れた。いつも外に出ている顔や手足よりも色の薄い、同居する広人が見たことのない、肌の色がふつくらと盛り上がっている。

その中心に縦の溝が、すつ、と刻まれている。

溝はぴっちりと閉じて、内側に隠したものを、甥には明かそうとしない。それでも広人は、異性を意識するようになってからはじめて目撃する女体の未知の部分をつつと凝視した。

「なにをじつとしてるの？ わたしの中を見たければ、広くんが自分の手で扉を開くのよ」

「ぼくの手!? 触っていいの?」

「もちろん。自分から積極的に動かないと、ポイントは取れないのよ!」

「はいっ!」

（触れる！ 女のに触れる！）

内心の歓喜にわななきながらも、広人の両手はのろのろとしか動かなかった。左右の親指と人差し指で、そつと縦溝をつまむ。つい声が出た。

「やわらかい！」

バレーボール選手として活躍する夏美を見てきた広人には、夏美の身体は筋肉質で硬いイメージがあった。指に伝わる恥丘や秘唇の柔らかさは、それだけで心が蕩かされる。

心はやはりながらも慎重に指を動かすと、閉ざされた秘密の肉扉が開放された。

広人の眼前に、鮮やかな花が咲く。

肉色、としか表現できない精妙な色合いの襷が何枚も重なり、花びらを形作っている。肉襷がはつきりと動いているわけでもないのに、広人は自分を誘っているように思えた。

（これが、女の……こんなに緻密で、きれいなのか……）

自分の女性器に見とれる甥に、夏美は教える。

「中も、触って」

指ではなく、口で、広人は応えた。叔母の股間に、再び顔を押しつける。手で開い

たままの女肉の花へ、深く口づけをした。唇だけでなく、鼻から口の下まで、ぬめる肉に押し包まれる。

「うん！」

夏美が喘ぎを漏らした。広人がはじめて聞く、甘い音色だ。

「そう。いいわ、広くん。そのまま、わたしのを舐めて」

夏美の指示と男の本能にうながされて、舌を伸ばした。たちまち舌が濡襞に挟みこまれる。不思議な味覚が、舌から口内全体に広がった。

甘い、とは感じない。美味でもない。しかし生々しい女そのものの味だ。

広人は未知の味覚に痺れる脳内で、工夫のない単語をくりかえす。

（すごい！　すごいすごい、すごいっ！）

一瞬で広人は味の虜（とり）になり、力強く舌をくねらせる。ぬちゃ、にちゃ、という音色が、自身の口蓋に反響して、直接脳に伝播した。

（すごいやらしい音だ！　ぼくが鳴らしているなんて、信じられない！）

音が味覚をより濃くして、味が音をより深くする。一心不乱に女性器を舐めしゃぶると、肉襞の奥からぬめる体液がにじみ出て、広人の喉を熱く潤した。

「ああ、いい。広くんは今、わたしにクンニをしてるの。わかる？　わたしを、口で

愛撫してるのよ」

(クンニ！ 愛撫！ ぼくが夏ちゃんを愛撫してる！)

「でも」

夏美の左手が、広人の頭頂部の髪をつかんだ。そのまま強引に頭を離す。

女性器から離された広人は、口のまわりを透明なぬめりで濡らした顔で思わず叫んでいた。

「なにするんだ!!」

クリームをつける甥へ、夏美は笑顔を与えた。

「舐めてるだけでは、童貞を卒業できないのよ。ちゃんと広くんのオチンチンを、わたしの中に挿入しなくちゃ、ね」

「は、はい！」

広人は膝立ちの姿勢から、ジャンプするように立ち上がり、トレーニングパンツを脱ごうと両手をかける。

だが広人がそれを下ろすよりも早く、さながら落雷のごとく夏美の右手がパンツの前のファスナーをつまんだ。ずらしていたブルマの股間の布がもとにもどり、唾液で濡れた肉花を隠した。

「トレパンを脱がないで」

「ええっ!? わっ、うわわ!」

夏美の手が、トレパンのファスナーを下ろし、トランクスの中に潜りこんできた。

広人は反射的に腰を引きかけたが、ペニスの幹を五本の指でがっちり握られる。生まれてはじめての、想像を超える感触が股間から全身へ突き抜けて、思わず甲高い声があふれた。

「はうっ!」

「広くんのおチンチンに触るのは、幼稚園のとき以来かな。ずいぶん大きくなったのね。立派に成長した姿を見せて」

ズキズキと疼く肉幹うすに新たな力が加えられ、パンツの外へと引っぱり出される。

体育館の照明の下に現れた男根を目にして、広人本人が驚きの声をあげた。

「ああっ、すごいことになってる!」

今までに見たことがない勢いで、ペニスがふくれあがっている。

夏美の指に握られている肉幹は、かつてないほど太くなり、自分でも存在を知らなかった静脈がくつきりとうねる。剥けきった亀頭は真っ赤に染まり、今にも内側からの圧力で破裂しそうだ。



女性器を舐めることに没頭していて、今までは自分の肉体の変化に思い至らなかつた。猛烈な勃起を目にした途端、燃え盛る欲望の高熱が、ペニスから全身へと流れこんでくる。

「したい！」

赤熱した肉棒を女の手で握られて、叫ばずにはいられない。

「夏ちゃんとセックスしたいよっ！」

「もちろん、するわ。ただし、わたしもブルマを脱がない。スポーツ用の服のままセックスするのよ」

夏美は右手で甥の勃起を握ったまま、左手の指でまたブルマの股間の布を横へずらした。

再び現れた叔母の秘花を目にして、広人の全身の血管がさらに大きく脈打つ。肉唇は、広人がしゃぶっていたときと同じに開いたまま、露出した花弁が甥を誘っているように見える。

「さあ、広くんのたぎるペニスで、わたしのコートにスパイクするのよ！」

そう言いながら、夏美は広人が動くよりも早く、自分の手で亀頭を女性器へ引き寄せた。

赤熱する亀頭が、肉の花弁の中心に押し当てられる。それだけで、快感の電流が、広人の神経を焼く。

「うあつ……」

広人の喘ぎ声が終わる先に、夏美の腕力が亀頭を一気に膣内に引き入れた。肉幹を握っていた右手と、ブルマの股間の布をずらしていた左手が、すばやく広人のトレパンの尻にまわる。そのまま背後から、尻を抱くようにして強く引き寄せた。

すべての動作が、ほんの一瞬だった。

一瞬で、広人のトレーニングパンツと夏美のブルマがぶつかり、ペニスは根もとまで膣の中に呑みこまれてしまう。

「あつ、ふえつ、ふあああ……」

言葉にならない喘ぎが、広人の喉を駆け上る。

トレパンのファスナーから突き出した肉幹と亀頭が、ぬるぬるに熱い粘膜に隙間なく覆われた。驚く間もなく、粘膜に強烈に締めつけられる。子供のころからバレーボールに打ちこんできた夏美の体内にふさわしい、獐猛な圧力だ。

「あああ、気持ちいい！」

そのぬめつく熱気と圧迫感が、広人の全身が蕩けるほどに心地よい。自分の手です

るオナニーなど遠くおよばない。これが本当の肉体の快感だと思い知らされる。

夏美も甥の若い肉塊を、自分の体内に呑みこんだ快感に痺れ、広人の尻にまわした両手の指をうねらせた。十本の指が、トレーニングパンツの下で強く緊縮する大臀筋をなでまわす。

甥の若い肉体を味わいながら、目の前で呆然とする男子高校生の顔へ、ニツと笑いかけた。

「どう？ わたしのエッチなところに、オチンチンを埋めた気分は？」

遠くの世界からもどってきたように、広人は瞳を輝かせ、表情をくるくると変化させる。

「た、たまらない。夏ちゃんの中、たまらな、ええっ!!」

突然、広人の腰の奥で、勝手に射精のスイッチが入った。本人の意志から離れた、不随意の身体の反応だ。

(入れただけなのに！)

まだ、ペニスを一度も動かしていない。ただ女肉に包まれているだけだ。それなのにダムが決壊したかのごとく、精巣から大量の精液が放出されて、猛烈な勢いで尿道を疾走していく。

「ああつ、で、出るっ！」

広人の脳裏に、外へ出すべきだ、との思いがよぎる。だが行動に移すよりも早く、膣肉の中で亀頭が激しく震え、暴発した。

「ああつ、だ、だめだっ!!」

射精そのものを目視できなくても、体験したことのない膨大な量の精液を、夏美の体内にそそぎこんでいるのが鮮明にわかる。同時に、今までくりかえしてきたどんな自慰よりも大きく深い快感が、身体中にあふれかえった。

「ああああああ……」

広人の不本意な愉悅のうめきに合わせるように、夏美も艶めかしい吐息をあふれさせる。

「はあああ、感じる。広くんのオチンチンが震えて、精液が出てるのを、わたしもはつきりと感じてるわ」

広人の耳に流れこんでくる叔母の声の音色の甘さに、自然と身体が反応して、また亀頭がわななく。尿道に残っていた精液を、最後の一滴まで、夏美の中へ搾り出してしまう。

「広くん、入れただけで射精したのね。わたしの中が広くんの精液で、とても熱いわ」

「ご、ごめん。こんなつもりじゃなかった……」

広人がこれまでイメージしていた初体験とは、あまりにも違いすぎる。誰とは決めていないが、楽しい恋愛のすえに、ファーストキスをして、自分のベッドでぎこちなく抱き合うというコースを夢想していた。相手は必ず処女だというこだわりはないが、同年代のかわいい女の子だといいなあ、と願っていた。

なにより、早々に射精するにしても、何分かくらいはもつものだと考えていた。

(入れた瞬間に、出してしまふなんて)

「恥ずかしい、と広くんは思ってるわね。いいの。最初はこういうものなんだから。わたしがはじめてした相手なんて、入れる前に、わたしのおなかをこすって、へそに向かつて出しちゃったのよ。それに、いっぱい出したのに、広くんのオチンチンはまだ、わたしの中で硬いままよ。恥ずかしいどころか、誇るべきオチンチンだわ」

夏美の両手が、広人の尻を大きく揺らした。尻たぶに十本の指が食い入り、からみつく膣粘膜の中で、勃起ペニスが前後に動かされる。

広人は思わずつま先立ちになり、大きく吠えた。

「くうああっ！」

「その調子よ！ 今度は、わたしを悦ばせて！」

夏美は巧みに膝を曲げて、甥とつながったまま、床にブルマの尻をつく。夏美が広げた太股の間に、広人の下半身が収まる体勢になった。

広人はなにかば無意識に、両手でバレーボールシャツの胸のふくらみをつかんだ。汗に濡れた布越しに、スポーツブラに収まった乳房のやわらかさが伝わる。

「夏ちゃん！」

なにを言えばいいのか迷い、ただ相手の名前だけを呼ぶ。

夏美は自身の昂り<sup>たかぶ</sup>を伝えるために、執拗に甥のトレパンの尻を揉みたてる。

「本当のセックスをするのよ、広くん」

「うおおおっ！」

返答のかわりに高く吠え、広人は力任せに腰を前へ突き出した。すでに夏美の中に深く埋まっている亀頭を、さらに子宮へ届けとばかりに押しこむ。

夏美の頭がのけぞり、甥の叫びに答えるように、熱い歓喜の喘ぎを噴き上げた。

「はうんっ！ 広くん、いいっ」

膣肉が強く収縮して、男根にしゃぶりつく。

射精したばかりで敏感になっているペニス全体が、女肉に強くこすられて、広人は新たな快楽の電撃に撃たれる。

叔母のブルマにトレーニングパンツをこすりつけながら、甥は歓喜の叫びを高々と放った。

「気持ちいいっ！ 夏ちゃんの中、気持ちよすぎるう！」

送りこまれる快感を燃料にして、腰を一気に引いた。夏美の愛液と自身の精液にまみれた肉幹が、膣口をまくり返して外に現れる。亀頭まで抜けそうになると、より勢いを乗せて、ブルマへ向けて突進した。

身体がぶつかる音が鳴り、再び肉棒が夏美の奥へと潜りこむ。

広人と夏美が同時にあげた喜声が、体育館の中でからみ合う。

「はううっ、気持ちいいっ！」

「あふうっ、広くん、すてきよ！」

広人は身体を支える両手で、無意識に夏美の胸を握りしめ、腰を振りたくり、女性器を突きまくった。すべてが初体験の男子高校生に、セックスのテクニクなどあるはずがない。燃え盛る本能と悦楽に煽られて、がむしゃらにピストン運動をくりかえすのみだ。

その乱暴なまでの熱い動きが、夏美も熱く燃え上がらせる。ひと突きひと突きに、夏美から見ればまだ少年である広人の挑戦心を感じる。若いからこそその後先を考えな

いひたむきさを、自分の中に打ちこまれていく感覚が、たまらなく心地よい。

「あああ、広くん、そうっ！ もっとアタックして！ スパイクしつづけて！ すぐいいっ！」

嬌声を広人へ浴びせながら、夏美はブルマをぐいぐいと突き上げて、ペニスの躍動をサポートする。まさに的確なトスを上げる名セッターさながらの働きだ。

夏美の腰の使い方を、広人が認識することはできなかった。そこまで意識がまわらない。ただ、どんどん大きくなっていく快感に痺れて、夢中になるばかり。

「うああっ、最高だ！ 最高だよ、夏ちゃん！」

一度目の射精よりは少し長くもったが、たちまち二度目の発射スイッチが、激しく点火されてしまう。広人本人が気づいたときには、すでに精液の奔流が、亀頭にまで到達していた。

「おおおっ、また出る！ また夏ちゃんに出すよっ！」

「来て！ わたしに二ポイント目を入れて！」

爆発寸前の亀頭を、広人は急いで奥へ突きこむ。ペニスだけでなく、自分の全身を膣の中に押しこむイメージで、脳内がいつぱいになる。

「夏ちゃん！」





もつと気持ちよくなりたいたい、と広人は反射的に腰を前に突き出す。

由貴は避けることなく、唇を少し突き出して待ち受ける。

（由貴さん、キス顔だ！）

そう広人が思ったときには、亀頭が唇に触れていた。

由貴は唇を焼く亀頭の熱量に、背筋を震わせる。

（あああ、この感じ！ たまらなく懐かしいわ！）

由貴は顔を右に左に傾け、音を鳴らしてキスを連続させる。

「んっ、ちゅ、ちゅ、ちゅっ！」

「うあっ、気持ちいい！ ぼくの亀頭にキスされてるう！」

わかりきっていることを、大きな声にしなくてはいられない。由貴は頭上から降りそそぐ高い声音を、目を細めて浴びる。

「すぐく悦んでもらえて、とってもうれしいわ」

由貴がフェラチオを覚えたのは、大学生のとき。二人目の恋人が、口で男のモノを愛撫することを求めた。そのときは、本当にそんなことを言う男の人がいるんだ、と驚きはした。しかし嫌な気持ちはなかった。

O L になってからつきあった三人目の恋人である孝史には、由貴のほうから、フェ

ラチオをしてほしい？ とたずねてみた。この申し出で、孝史が前の男に激しく嫉妬するようなら、つきあいをやめるつもりだった。

孝史は驚きはしたが、喜んでくれた。自分が前の恋人としたこともふくめて、由貴を愛してくれた。そして孝史と結婚したのだ。

「まだまだ、これからよ。広人くんをもっともつと気持ちよくしてあげる」

唇を開いて、舌を長く伸ばす。唾液を乗せた舌の表面で、亀頭を舐めまわした。

「はうっ！ あ、あくっ！」

広人の引きつった声が、由貴の耳をくすぐる。広人は、由貴が処女を贈った最初の恋人よりも若い。女から悦ばされることに慣れていない声が、タブーを犯している気分にならせて、由貴をいつそう熱く興奮させた。

「はあっ、広人くんのペニスをいただくわ」

口を大きく開き、亀頭全体を口内にふくむ。それが由貴にできる限界。肉幹までは呑みこめない。そのかわり、かつて恋人や夫にしたのと同じ熱意をこめて、舌と頬の内側で、広人の熱い肉塊をしゃぶりたてる。

「んふっ、んちゅっ、るろ、はんんん……むっ、ちゅんん……」

唇の端から漏れる潤んだ吐息と濡れた摩擦音とともに、怒濤の快感が広人に押し寄

せた。亀頭がキャンディのように舌の上で溶けて、由貴の喉に流れていく気がしてならない。

「はうう、由貴さんの口、す、すごすぎる、うあっ！」

蕩ける下半身に、新たな愉悅が加わった。由貴が亀頭を咥えたまま、両手で睾丸を包みこんだ。十本の指が、やわやわと左右の玉を揉む。

「そんなことまで、してくれるなんて！」

これも夏美からは教えられなかったテクニクだ。未知の感覚がフェラチオと相まって、広人の性感を一気に頂点へ飛翔させた。

「ああっ、気持ちよすぎる！ くううっ、由貴さん、もうっ、出てしまおうっ!!」

自分の極まりの叫びを聞いて、由貴が口を離すと思った。

しかし由貴は亀頭を咥えたまま、広人の顔を見上げて、こくりとうなずく。両手の指も睾丸から肉幹へ移り、射精をうながすようになでさする。

由貴が精液を飲むつもりだと気づくと、広人は怒濤の勢いで限界を突破した。

「由貴さんんっ!!」

体育館に名前を反響させ、広人は両手で由貴の頭をつかんだ。尿道が絶頂に焼けつく。痛くしないように気を使いながら、短い髪をくしゃくしゃとかき乱す。

由貴は口内の奥を、猛々しい精液の奔流で撃たれて、感激のうめきをほとばしらせる。

「うっむんんっ！」

舌だけでなく喉にまで、精液独特の粘つく味が広がった。

（はっあああ、おいしいわ！ 男の味が染みこんで、たまらないっ！）

由貴はほとんど無意識に亀頭を強く吸い上げ、尿道の中に残る精液も吸引した。

亀頭を咥えたままの熟女の喉が動く姿を見て、広人は裸の尻を震わせる。

「飲んで！ 由貴さんが、ぼくの精液を飲みこんでる！」

由貴はようやく男根を吐き出し、開いた口の中を広人へ見せた。まだ舌の上に白いものが少し残ってはいるが、精液のほとんどは消えているのがわかる。

「広人くんの男のエキス、とつてもおいしかったわ」

「それ、本当においしいんですか」

「気分の問題かな。女の身体は気持ちがいせつなのよ。だから、今度は広人くんが、わたしの気持ちをよくしてね」

由貴は立ち上がり、ブルマを前へ突き出した。

それだけで広人は察して、逆に床にひざまずく。立ち位置が逆転して、広人の顔の

前に、濃紺の股間が来る。

「三日前の体育館で、夏美さんにしたみたいに、ブルマの上から舐めて」

「はい、やります！」

広人は両手を、由貴のブルマが貼りつく尻にまわした。さわさわと尻たぶの丸みをなでて、十本の指を布越しに肉に食いこませる。

ブルマを舐める、と意識した途端に、汗の香りが鼻腔を染めた。まだたいした運動をしていないので、かつての夏美みたいな濃厚な匂いはしない。そのかわり、もっと奥にある女体の秘密そのものの香りが伝わってくる気がしてならない。

由貴の尻を支えにして、顔をブルマに埋める。

「ああっ！」

由貴は声をあげ、ついさつき広人がしたように、両手で男子高校生の髪をかきまわした。

「あ、この感じ……うんん、おかしいわ……」

由貴が男にクンニリングスされるのは、はじめてではない。フェラチオをした恋人も夫も、お返しに女性器を悦んで舐めてくれた。互いに股間に顔を埋めて、シックスナインもよくした。

夫の死後から三年も男と交わっていないとはいえ、クンニの感覚は、由貴の肉体が覚えていた。

今は、普通のシヨーツよりも生地の厚いスポーツシヨーツを穿き、その上にもっと厚みのあるブルマを身につけている。それなのに広人の鼻や口で恥丘を押された途端に、鮮烈な電流が肌の表面から膣の奥へと走り抜けた。

三年ぶりにフェラチオして、精液を飲んだから、身体が昂って敏感になっているに違いない。でも、それだけではないと、由貴は直感する。

（ブルマを穿いてるから？　これがブルマの力だというの？　そんなバカな、あっ！）  
広人の唇がブルマに吸いつき、舌で中心を強く舐めてきた。二重の布を通して、舌先が肉唇の狭間をなぞる。中に侵入してくるわけではない。ブルマにはばまれて、ただ表面に軽い圧力を感じるだけ。

「はうっ、うっんんん……ああ、どうして……」

まだ閉じている秘裂の奥で、白熱電球が灯ったように、じんわりと熱を帯びる。同時に、熟した果実を搾ったかのように、水分が恥丘の内側に満ちる。

白熱電球も、果実も、ずっと自分の中にあつたことを思い出した。夫を失ってから、いつの間にか存在を忘れていた。忘れていたことが、かえって夫への背信のように感

じてしまう。

広人の舌が連続して上下に動くたびに、熱も水分も存在感を増していく。そして舌先だけの刺激ではものたりなくなる。

（あああ、焦れたい。もっと、強くいじってほしい！）

広人の髪をくしゃくしゃにしながら、由貴は切迫した声をぶつけた。フェラチオで見せていた大人の女の余裕を、かなぐりすてる。

「広人くん、手で触って。指で愛撫してほしいの」

一瞬、言葉を切り、すばやく自分が求めているものを考え、つけくわえた。

「ブルマの上からよ！」

広人はブルマの股間から口を離し、唾液の糸を何本も伸ばして答える。

「わかってます」

反射的に返答したが、広人は内心では早く由貴のブルマを脱がせたかった。ブルマに意味があるのだ、とこの三日間に夏美から何度も念を押されて、広人はうなずいてきた。じつは、いまだにブルマの効果を疑っている。

（でも、由貴さんも望んでいるから、やらなくちゃ）

由貴の尻を強く握っていた右手を離すと、ブルマの唾液に濡れた部分に、指を突き



入れた。ブルマとスポーツショーツが優秀な伸縮性を発揮して、指先が埋まる。布越しのクンニでゆるんだ秘唇が割り広げられ、そろえた指が侵入した。

「あひっ！」

由貴は細い声をあげて、腰をくねらせる。フェラチオとブルマを通したクンニで感度が鋭くなった女肉をこすられ、とてもじつとしていられない。

下半身のうねりが、さらに指を深くブルマに潜らせた。それがまた新たな悦楽を招き寄せる。

「んんっ！ くうう、あんっ！」

スポーツショーツの内側の布で、充血した肉壁をこねられる。三年ぶりに味わう男から与えられる快感に、全身が沸き立つ。

（でも、まだよ！ まだ、足りないわ！）

夫にも言ったことのない言葉を、気がつけば由貴は口から飛ばしていた。

「広人くん、クリトリスよ！ クリトリスをいじって！」

「え、クリトリス!?!」

広人は耳を疑う。夏美は特訓の最中でも、指示代名詞を口にするだけで、女性器の明確な名称を言わない。それが女の恥じらいだろう、と思っていた。

広人はつい聞き返す。

「由貴さんのクリトリスを触るんですか？」

「そうよ。クリトリスよ！」

由貴は顔の赤みをより濃くしてどなった。胸の内では、羞恥の感情がグルグルと渦巻く。由貴本人も、広人同様に驚愕している。

（信じられない。クンニしてもらっただけならまだしも、自分からこんな恥ずかしいことを言うなんて、いやらしすぎるわ！）

自分の言葉に戦慄しながら、口から出る欲望の叫びを止められない。

「クリトリスで、わたしをイカせて！」

（由貴さんが、ぼくに、イカせてもらいたがってる！）

広人は返事を忘れて、尻たぶをつかんだままの左手の指に力をこめ、ブルマに突き刺した右手の指の位置を変えた。実際のところ、指先が肉唇の内側に入っているのはわかるが、ブルマとスポーツショーツを挟んで正確な感触が伝わるはずもない。夏美の肉体で覚えたクリトリスの位置を頼りに、まさぐるしかなかった。

（……ここかな）

当たった。

衝撃が、由貴の身体を貫き、熱い鳴き声となって喉から飛ぶ。

「あひいっ！」

やはり、長い間、忘れていたインパクトだ。夫の死後に、セックスだけでなく自慰すらしていなかったことに思い至らされた。

結婚前の恋人がいなかった時期には、自分の指で陰核をこすり、悦びを味わっていたのに、そんなことすら忘れていた。夫の死とともに、自分が女であることを捨ててしまったようだ。

今、若い少年の指に押されたスポーツショーツの布で女の芯をこすられて、信じられない勢いで快感があふれる。泉の水のように湧くのではなく、猛烈な間歇泉の噴出のようだ。恋人や夫にショーツの上から責められたことはあるが、これほど鮮烈ではなかった。

（これもブルマの魔力だというの!!）

由貴の全身がビクンとわななき、一拍遅れてかすれた声が喉からあふれる。

「そこっ！ あああ、そこ、いっ！ ひいん、つづけて！」

今までとは違う熱量を帯びた声音が、広人の指の動きを加速させる。指先を小刻みに震わせて、クリトリスがあるらしき箇所をつつく。三日前に童貞を脱したばかりの

少年に、加減などできない。たぎる欲望のままに、全力で指で突きまくる。

「あおっ！ そっ、それっ、たまらない！」

女の急所を遠慮も容赦もなしに責めたてられて、全身の血液がぐらぐらと沸騰した。「はっひいひい！ 熱い！ 気持ちいい！」

経験したことのない早さで、自分が限界に達しようとしている、と由貴の本能が警告する。三年間も晴らされることなく蓄積されていた性感が、一気に解放されるのだとおののく。

おののいてはいても、由貴は逃げはしない。逆に、自分から腰を突き出し、広人の指を求めた。

自身の動きが、とどめの一撃となる。

忘れていた白い閃光が目の前で炸裂し、高熱が身体のすみずみにまで満ちる。

「イクうっ!!」

由貴の両腕が勝手に動き、広人の頭を抱きしめた。少年の顔を、自身の光陽サンダースのユニフォームの腹に、強く押しつける。

「ううう………」

由貴の声がかすれて消え、ただ喉がわななき、唇がパクパクと開閉する。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**